

はじめに ——《文化間》への視座——

久保田 浩

本論文集は、所謂〈文化論〉の諸論考を取録したのもでも、様々な時代や地域、様々な社会領域で観察される〈文化〉言説を論じた諸論考を蒐集したものでもない。また、〈文化〉概念の錯綜した諸相を個別事例において考察し、交通整理をし、その概念史を振り返り、今後の概念使用の指針を提示しようなどという大胆な企図でもない。本書における〈文化〉は、変容と創造・想像という事態に着目する為の方便である。

I 文化的産物の創造力—本質主義的言説を眺めつつ—

文化的産物は、人間の創造的かつ想像的営為によって生み出されていく。そしてそれは決して〈無からの創造〉ではなく、その都度の具体的な文脈における所与を出発点として産出されていく。この所与は、様々な名称で呼ばれるのを常とする。〈伝統〉、〈文脈〉、〈制度〉、〈体制〉、〈言語〉、〈システム〉、〈構造〉等々、そして〈文化〉もその一つであろう。こうした所与が、ある社会内で自明の所与として、つまり、その社会内の成員（或いはその社会を外から眺める人々）にとって当初より与えられてあるところのものとして自明性を獲得し、自覚的にそれを反省する必要性が認められない場合、この所与についての語りは所謂本質主義的な語りという

姿を呈してくる。人間の創造力と想像力の産物は、既に与えられてあるところのものとして捉えられ、権威を帯び、規格化された形で共有財として称揚され（例えば、文化財として）、習得・獲得させられ、それによって社会の成員を〈教養〉ある〈文化的〉人間（つまり、〈反社会的〉ではない人間）へと仕立て上げる為の対象物として道具化される（例えば、学校において）。人間の創造力と想像力自体もこうして規格化され、そして文化的産物が複製再生産（〈伝承〉）されていく（例えば、諸々の文化産業において）。しかし、これも文化的産物の生産・流通過程のひとつであることに変わりはない。それどころか、これこそが〈文化そのもの〉と看做される場合が多くあることは、わたしたちの日常の経験が如実に物語っている。

こうした規格化された文化的産物に対して、規格化されない、即ち、社会によって権威が賦与されず、認可されず、果ては認知さえされない文化的産物もある。それでも何とか認知された場合には、〈逸脱〉や〈とんでも〉という穏当なレッテルが貼られて、物笑いの種か精々苦笑の対象とされるか、或いは〈異質〉な〈異物〉として、〈異なるもの〉として、排除されていく場合もあろう。但し、〈正統性〉どころか、〈異端性〉というレッテルさえ貼られずに、居場所さえ提供されることなく無視され、誰からも見向きもされない、屑同然に扱われる文化的産物が大多数を占めているのではあるが。いずれにせよ、社会内のこうした〈逸脱〉は、勿論のこと、時代を超えて不変的に〈逸脱〉的なるものであり続けている訳ではない。〈逸脱〉はその都度創造されていくものであって、それを囲い込む境界線の画定という行為によって、〈逸脱したもの〉と同時に、〈正統なるもの〉も生み出されて（構築されて）いく。ある何らかの文化なるものを統一的で、一枚岩的で、確定的なるもの、不変的なるもの、永続的なるものとして本質主義的に捉えるということは、こうした文化なるものを生み出すという一つの行為でもあって、自らの内にある、或いは眺める対象の

内にある何物かを、〈異物〉として特定し、境界線を画定し、それをこの境界線の一方の側（〈むこう〉側）に囲い込み、もう一方の側（〈こちら〉側）を〈本来的なるもの〉として標準化し規格化し権威化するという営みであるとも言えよう。

興味深い一例は、明治初期の新政府の宗教・文化政策に見られる言説である。周知の通り、明治政府の所謂近代化政策の言説に見られる一特徴は、ある一群の文化的産物を「淫祠邪教」と名づけることにあった。それは近代日本にとっての〈異物〉であり、存在することが許されないもの、或いは近代化の阻害要因、と捉えられたが、何らかのものをこうして「淫祠邪教」として囲い込むことは同時に、「近代日本」を、それも「神教」「神道」を骨格とする「近代日本」を生み出す作業と同義でもあった。容易に察せられるように、一見 180 度正反対のベクトルのように見える「近代日本」、「神道」へと向かう方向性の両者は、当初より外側に〈前近代的なるもの〉としてあった「淫祠邪教」を再認識し、この〈異なるもの〉から峻別されるべき〈本質〉や〈根源〉を再発見するといった作業ではなく、自らの内側に根を張っていた何物かを境界線の〈むこう〉側の存在へと組み変える作業によって新たに何物かを生み出している、という点で共通している。「近代日本」はそれまでの「前近代」社会の中に蔓延る何物かを「淫祠邪教」（非合理的なるもの）として、「神道」はそれ以前の神仏習合的かつ呪術的宗教世界から何物かを「淫祠邪教」（迷信的なるもの）として、ゲッター化することによって生成してきた〈本来の〉、〈固有の〉日本の姿であって、境界線を想像し、創造するという文化的営みの産物であった。当然のことながら、その結果として生み出されたゲッターは、壁に囲まれ日当たりも悪くなりながらも、「近代日本」の傍らに、恐らくは居心地悪く（誰にとって？）、存続していくことになるのである。

II 創造と接触

更に興味深いのは、こうした本質主義的に創造された「日本」なるものは、**接触**によって生み出されたという事実である。「近代西洋」なるものと接触しない限り、「近代日本」なるものは創造されることはなかった。

しかしながら、**接触**とは、比喩である。文化と文化とは、字義通り接触したりはしない。〈東洋〉と〈西洋〉とは文字通り接触したりはしない。所与が、〈伝統〉が、〈文化〉が、そして〈東洋〉なるもの（そしてそれと同時に〈西洋〉なるもの）も創られるものインヴェンテッドであるという一面を持つものであるとするならば尚更である。文化と文化との〈出会い〉や〈邂逅〉というのも、比喩である。**接触の結果として**生み出された〈日本文化〉と〈西洋文化〉が相互に独立した主体として出会い、触れ合うわけではない。出会い、触れ合うものは、モノとモノであり、人と人であり、人とモノである。人が接触するモノは、**文物**であり、それには情報や言説を蓄えたモノ（エクリチュール、パロール）等も含まれよう。**闖入してきた人と文物、それらによって運び込まれてきた情報や言説との接触による創造**の一例としては、仏像との接触による神像や漢字との接触によるかな等が挙げられよう。16世紀中葉以降の南蛮貿易やオランダとの通商、19世紀の薪水を求める外国船の来航を契機とする「日本」の創造を持ち出さずとも、接触による創造は、遅くとも6世紀以降の蕃神の誕生以来、絶えず繰り返されている過程である（「蕃とりのくにのかみ神」という概念自体、構築されたものであり、同時に「国神」くにかみをも生み出すこととなる）。確定的な史料がない故に、歴史的にそれ以前に遡及することは不可能であるとしても、人と人とが、人とモノとが触れ合うという事態と、そこから生じる文化的創造とが、歴史的に絶えることはなかったし、これからもない。

接触による境界画定、並びに〈他なるもの〉と〈自なるもの〉との創

造という営みの例は枚挙にいとまがない。視点を別の地域に移してみれば、例えば、初期キリスト教の歴史的展開においては、グノーシス的なものをグノーシス的なものとして認知する（境界線を引く）という囲い込み作業を通して、「正統」キリスト教なるものの姿形が生み出されていく。接触は、あるものを〈異なるもの〉と認める認知的メカニズムの発動を惹起する。こうして「異教」と同時に、それとは明瞭な一線を画しているとされる「キリスト教」なるものが生み出されていく。古代の教父たちの著作が例証している通りである。ここで、「^{クリスティアノス}キリスト教徒」なる概念が他称として誕生してきたことを想起しておいてもよいだろう。但し当然のことながら、「異教」の象徴体系の一部は、「キリスト教」の典礼や教会暦の中に取り込まれ占有されていくのであるが。けれども他方で、〈異なるもの〉の認知的メカニズムは、接触の後の切断（＝境界線の画定＝〈自なるもの〉の創造）が完了したかに見えるや否や、再度発動され、更なる創造を繰り返していく。〈自なるもの〉の画定作業は終焉を迎えることがない。〈自なるもの〉が〈自なるもの〉であり続けるために、今や一旦画定されたかに見えた境界線の内部に更に〈異なるもの〉を生み出す認知的メカニズムが働き始める。自らの内と考えられた域内の何物かを「異端」として囲い込むことによって、〈自なるもの〉を絶えず創造し続け、今度は切断された〈異なるもの〉としての〈むこう〉側の「異端」との接触が禁じられることとなる。けれども当然、こうして別物とされた以上、「正統」は「異端」と接触し続けざるを得ず、それによる文化的創造も継続していくこととなるのではあるが。

初期キリスト教は単なる一例に過ぎない。接触による創造は、ルネッサンス以降のエソテリズムや自然哲学がルター派正統主義を生み出し、スウェーデンボリの霊視がカントの啓蒙理解を形作ったように、人類の歴史における常態的な営みである。〈自なるもの〉の自明性（〈国家〉、〈学問〉、〈文化〉、〈制度〉、〈言語〉、〈宗教〉等々）から立論する、後世の本質主義

的歴史叙述が、そうした接触を顧慮せず、奇抜で珍奇な〈逸脱〉に過ぎぬとして〈歴史的重要性〉を認めず、或いはそれを認知さえしないとしても、である。確かに、こうして生み出された〈自なるもの〉と〈異なるもの〉とは、それが所与として受け止められるようになる、或いは受け止められることを要請する政治的・社会的諸条件が生み出された時点で、〈自文化〉と〈異文化〉として実体化させられることが往々にしてある（この〈文化〉は、〈伝統〉、〈制度〉、〈学問（分野）〉、〈システム〉等々と言いつ換えられてもよからう）。決定的なのは、それらが実体化されて捉えられていようがまいが、それら相互の接触は避けられないということである。勿論、意図的にかつ自覚的に没交渉であろうとすることは不可能ではなからう。社会内〈システム〉の自己保存のみを図り、既存権益を死守しようという実践的思惑もあろう。けれども、現実的にそれが可能であるかはかなり疑わしい。例えば、20世紀中葉より「異文化間理解」「宗教間対話」「学際性」等々の「インター何々」が声高に叫ばれ、そうしたものに一定の肯定的価値が賦与されているという実態に目を向ければ、そこで希求されているのは、接触による創造と表現され得るひとつの事態であると述べても決して過言ではなからう。但し、そこで自明視されている前提（境界線の存在と各〈文化〉の事実的実体視）こそが、本論文集が批判的に光を当てようとしているものではあるが。

接触による創造は、一回限りの接触という事態と一回限りの創造という出来事ではあり得ないという卑俗な認識は、ここで改めて強調しておいてもよからう。接触の諸相の複雑性は、増大しこそすれ、低減することは稀である。引かれるべき境界線があるとしての話だが、境界線は絶えざる接触と創造という営みによって、流動的たらざるを得なくなる。ある境界線が所与として権威や自明性を享受している限り（因みに、ある境界画定を維持し続けるためには、一定の暴力が必要となってくる）、流動性は確かに押さえ込まれているが、それでも新たな接触は〈外〉からも〈内〉から

も忍び寄ってきており（つまり、絶えず〈むこう〉と〈こちら〉の間が新たに引き直されることが求められ）、固定的であるかのように喧伝される境界線は絶えず脅かされることとなる。

このように、複数の或いはある一つの〈文化〉そのものが生まれてくる、或いはそれ（ら）から、別の〈文化〉（〈セクター〉、〈サブシステム〉）が生まれてくる（囲い込まれる、排除される、独立する等々）のは、先述の「正統」キリスト教の事例に見られるように、固定化した静態的な出来事ではなく、ひとつの^{プロセス}過程である。それは、接触そのものが動態的な出来事であることと併行している。こうした動態的な過程において生み出される〈むこう〉と〈こちら〉の間、〈文化〉間へと眼差しを向けること、それが本論文集が為そうとする一つの試みであると言ってもよからう。

III 創造と想像

しかし接触による創造という営みは、同時に想像的行為であることも銘記しておいてよからう。「近代国民国家」が「^{イマジナリ}想像された共同体」であるといった指摘を俟つまでもなく、創造的営為と想像的営為とは、所与を出発点とした創り出すという行為の両輪である。勿論、想像されたものが具象化されるとは必ずしも限らないが、芸術表現（形・音・^{パフォーマンス}所作・テキスト）のように、実際に具象性を帯びさせられることも多く、それらは場合によっては〈文化〉化・〈制度〉化されたりもする。

具象化され、更には〈文化〉化・〈制度〉化された想像力とその産物（その特徴は、虚構的であることが許されているという社会的合意である）は、当該の社会内で一定の価値が賦与され、一定の、保障されて確立した地位を享受することとなる。上で示唆したように、〈制度〉化された〈文学〉、〈芸術〉、〈宗教〉等は、〈教養〉の一部として正典化された〈文化〉や〈伝統〉に属していると看做されることが往々にしてある。但し一方

で、制度化されていない想像力は、社会から排除される（虚構的であるから許されない）までに至らない場合、社会でのその存続に政治的（例えば、文教政策的）意義が認められる場合には、〈民間習俗〉として社会内で〈文化〉化されることもある。そして特徴的なことは、こうした〈制度〉化され、〈文化〉化された想像力とその産物は、もう一つの〈制度〉化・〈文化〉化された想像力、即ち、特権的地位を賦与された、想像力の特殊な一形態である〈学問〉によって主題化されるのを常としている、ということである。こうして、想像力の産物は、別の想像的営為によって、その存続が〈公認〉され、担保されていくという、想像力の自己確認作業の中で一定の地位を保っていくことになる。

ここで興味深いのは、〈ハイカルチャー〉や〈学問〉という想像的営為の主体は〈知識人〉と呼び習わされている人々であるということである。〈民衆（下位に位置づけられた者）〉の想像的営為自体への到達不可能性から語り始めざるを得ない〈知識人〉が、〈民衆〉を代弁しているか否か、代弁が可能か否か、という問いと並んで重要と思われるのは、〈知識人〉が〈知識人〉たるために、〈知識人〉の想像力とその産物の内部で、制度化されてはならないとされる何物か、〈文化〉と呼ばれるに相応しくないと思われる何物かを生み出して、〈むこう〉側に囲い込んでいるのではないのか（「学問的研究対象に値しない」とされるものを創り出しているのではないのか）、更にはその果てに、如何なる〈学問的〉、〈文化的〉戦略によって、〈むこう〉側に追いやったものを無害化・中性化して〈こちら〉側に改めて取り込もうとしているのか、という問いであろう。ルネッサンス期の思想や美術における魔術（ネオプラトニズム）の取り扱いを巡る諸問題はその一例であろう（例えば、「人文主義的哲学者」フィチーノ）。けれども、〈知識人〉の想像的営為が押し並べて〈制度〉化され、〈文化〉化される（〈こちら〉側に取り込まれる）という訳でもない、ということには注目しておいた方がよいであろう。ヘルメス主義者フィチーノの魔

術的想像力は、多少〈逸脱〉していると看做されたとしても、それでも、「哲学者」「人文主義者」という〈知識人〉の想像力という格付けを与えられているが、文化的産物一般と同様、認知もされず、精々屑同然に扱われているような、〈知識人〉の想像力の産物は無数に存在する。

「ルネッサンス哲学者」フィチーノの魔術論の成立は周知の通り、ヘルメス文書との接触である。接触による創造の場合と同様、接触は想像力の発動を惹起する。それは、〈文化〉化されない〈知識人〉の想像力の場合も同様である。古来のト占と甲骨文字に関する情報との接触は、鎌倉期以降、日本に固有とされる神代文字の存在を想像せしめ、ムスリムとの軍事的接触は、十字軍の苦境の最中の12世紀、東方で活躍しているとされたキリスト教的王である祭司王ヨハネスを夢想せしめた。また「偽史」や「偽書」の歴史は、こうした、接触による想像の事例を豊富に提供してくれる。例えば、プラトン以来のアトランティス伝承とキリスト教聖書と言語学との接触に基づく想像力の発動は、古フリジア語で書かれた「フリースラントのアトランティス」の年代記であるとされる『ウラ・リンダ年代記』を生み出し、狩野亨吉が1936年に偽書と断定した古史古伝の一つ『竹内文書』は、近世日本の知識人の接触した情報（ヨーロッパを出自とする歴史、地誌、宗教、伝承等）によって喚起された想像力から生み出されたものである。

最後の二つの例が示しているのは、〈知識人〉の想像力が持つポエティクス（〈文化〉の創造）とポリティクス（〈文化〉の利用）との両面を見事に示していることである。〈制度〉化され、〈文化〉化された想像力の産物が、単に保護されるべき想像力の発露としての地位を超えて、政治的に道具化される契機を内在させているのと同様、〈制度〉化されず、〈文化〉化もされない〈知識人〉の想像力の産物も、この二つの例が如実に示するように、ゲルマン至上主義的な文化的優越性の言説や超国家主義的な拡張主義的言説との接触を通して、政治・文化的言説として更に想像され、

創造されていくことにもなるのである。このように、想像されたものは、両面的に働くことにもなる。

IV 《変容》？《創造》？それとも？

接触による創造と想像という動態的過程としての文化的生産（物）について論じる、しかも〈学問的に〉論じることは可能なのであろうか。その際、誰によってどのような人々が想像し創造する主体として想定（想像？）されているのであろうか。文化的生産においては、一体誰が想像し創造しているのであろうか。とりわけ、〈学問〉という文化的営為においては。

〈学問的に〉論じる〈学者〉（〈制度〉化された想像力の駆使を生業とする〈知識人〉）が、想像し創造しているものは、まず第一に、モノや人との接触を契機として、それ自らが想像し創造しているとされる〈対象〉なるものであろう。そうであるならば、〈学問〉という名の文化的営み、想像的かつ創造的営み自体も、接触による想像と創造という文化的生産の一環であって、本論文集もこうした想像的かつ創造的な文化的生産物の一つであるということになろう。

上で示唆したように、社会において特権を享受しているこの文化的営為は、文化接触を論じる際に、様々な概念を用いてきている（上で論じたように、接触も一概念である）。「文化変容」^{アカルチュレーション}「文化適応・文化的受肉」^{インカルチュレーション}「文化適応」^{エンカルチュレーション}「間文化」^{インターカルチュラリティ}「混種性」^{ハイブリディティ}「クレオール性」^{クレオリテ}「習合」「混淆」「折衷」等々。必ずしもこれらの概念使用を正確に特徴付けようとする意図はないが、これらの諸概念に見られる前提に目を向けてみれば、概ね次のように言っても大過はないであろう。「文化変容」「文化適応」は、接触による変化という理解から出発している。即ち、何物かが変化する前の何らかのあり方が想定されており、変化した後のあり方との関連でそれが（肯定的であれ否定的であれ）価値づけられているようである。一方、

「間文化」以降は接触によって生み出された（とされる）あり方、或いは接触という過程それ自体に一定の価値が与えられている場合が多いと言えよう。両者のグループに共通しているのは、変化する前後の何物かであっても生み出された何物かや過程であっても、それらに何らかの価値が賦与されているということであろう。そしてこの価値賦与の主体は〈学者〉という、ある特殊な文化的生産者なのである。

この種の文化的生産者が生み出しているものが所謂〈現実〉であるか否かというカント的な認識論の議論や、ポルトコロニアル批評的な知識の権力性批判の議論にここで入り込むつもりはないが、少なくとも以下の点を指摘しておくことは無意味ではなかろう。まず繰り返しになるが、こうした諸概念は、ある文化的営みの想像的かつ創造的産物であるという点である。そして、それらはある価値を帯びさせられている。こうした価値賦与は恐らく、あらゆる文化的生産行為に共通の特徴であり、〈学問〉という営みもその例外ではなく、その生産行為やその産物は、それに帯びさせられたそれぞれの価値に応じて、教条的にもなり、抑圧的にもなり、道具化もされ、体制維持的にもなり、体制批判的にもなり、また解放的リベレイティングにもなり得る。第二に、この文化的営みが生み出す〈現実〉認識の諸命題は、この文化的営みに参与していない人（とりわけ、〈対象〉として措定された人）の世界認識（少なくとも、その人の自覚的なそれ）との間に齟齬を生み出さざるを得ないということである（この表現には、カントの認識論に見られる諦観的含みはない）。よりこの序文の論旨に沿って表現するならば、この齟齬こそが、この溝こそが、この種の文化的営みが特徴的に産出するものであるとも言えよう。こうした〈現実〉認識の諸命題が、〈対象〉の〈現実〉認識それ自体であると主張される場合、それは、この文化的営みが画定した境界線の〈こちら〉側に〈対象〉を無害化して産み落としているということと同義であり、境界線の〈むこう〉側にも、〈現実〉として意味づけ、価値づけされない（場合によっては有害とされる）何物

かを同時に産み落としているということが、ただ明示的には宣言されていないということに過ぎない。問題は、「変容」であれ「間文化」であれ、それは生み出された〈現実〉であって、それを生み出す作業は絶えず動態的な過程であり続け、それ自体が「変容」し、更なる「間文化」を、更なる〈文化〉間を、更なる溝を生み出し続けることになるのであろう。

V 本書の構成

従って、本論文集も、人やモノの接触によって想像・創造された文化的生産行為や生産物との接触によって、〈学問〉という形式で想像・創造された文化的生産物である。

第一部は、**接触**と**変容**をキーワードとして、以下の三論考から成っている。ブラジルという〈文脈〉において、**接触**・**混淆**・**移動**の中での**創造**（アフロ・ブラジリアン宗教の生成）を論じた丸山論文、300年という長いスパンにおけるアヤソフィアの**転用**と**混淆**を通して、政治性（政治的記憶の成立と継承）と文化性（博物館性）との交錯、並びに**変化**を許容した社会の様相を描き出そうとする山下論文、そして、ヨーロッパにおける**禪**の誕生と展開を、内部において差異を抱える「**禪**」なるものとの多様な主体の多様な**接触**のあり方から生まれてくる何物かの動態を描き出そうとする佐藤論文である。これらの論考が描き出しているのは、**接触**する主体は決して一枚岩ではないこと、その内部に**多様性**と**差異**とを抱え込んでおり、それが**創造**の**動態的**過程を生み出している様相である。

第二部は、第一部とは異なり、言説における文化的生産に着目する諸論考から成っている。「**予言**」という**異種混淆**的なジャンルを東アジアという〈文脈〉から照射し、とりわけ未来記『野馬台詩』の著者と目される僧宝誌が**想像**・**創造**される様相を描き出す小峯論文、ラブレアの文学的創作において、テキスト〈外〉の諸価値との**接触**が生み出す、（ジャンル、モ

チーフ、システム等々の) 混濁的な世界をテキスト〈内〉に創造する営為を論ずる平野論文、根無し草性・混濁性を同時に一枚岩的な「キューバ的なるもの」として称揚するオルティスの言説に見られる、一方で将来的変容へと、他方で〈他なるもの〉を排除する「自分語り」へと向かうベクトルの拮抗を描き出す林論文、そして、「反ユダヤ主義」という知の言説をポリテックスに還元されない諸言説の折衷・浸潤の創造的行為として論じる久保田論文である。この第二部では、こうして、言説生産における想像力に基づく混濁と創造とが主題化されている。

第三部は、文化接触における〈内〉と〈外〉の生成が論じられることとなる。まず、学的言説が、多領域を横断する現象として概念化される「スピリチュアリティ」と「グローバリゼーション」との接点において、〈外〉を参照枠とした「セルフ・スピリチュアリティ」概念を要請していることを説く小池論文、植民地主義的〈文脈〉において創造された〈内〉が、〈外〉を如何に表象することとなるのか、とりわけ教育という場において如何なる「外来文化」が創造されることになるのかを分析する市川論文、そして、アイヌをキリスト教宣教の〈対象〉、即ち〈むこう〉側として眼差す宣教師たちの立ち位置と、「邂逅」の産物としてのキリスト教的アイヌという〈外なる内〉、〈内なる外〉という眼差しとの創造を、対比的に論じる西原論文である。こうして第三部では、接触による〈内〉と〈外〉の生成の多様な相が浮き彫りにされると同時に、〈内〉と〈外〉の生成に潜む政治性に光が当てられている。

勿論のこと、こうした三つの境界線引きは、本論文集に収録された全論考に一つの道筋(〈構造〉、〈文脈〉)を与えようとする試みに過ぎない。各論考は、それぞれの独自の問題提起によって導かれており、この三つの問題領域のそれぞれを縦横無尽に往来し、それぞれを超えた分析の観点を提示している。この序文がこうした境界線を画定して各論考を囲い込んだそ

の〈むこう〉側に、この序論が語ることなく（気付くことなく？）想像・創造している溝に、〈文化〉間にこそ、本論文集が問おうとしている文化的生産の鍵が見え隠れしているはずである。